

平成 28 年度人生二毛作推進県民会議（事例発表会）発表概要

日時：平成 29 年 2 月 2 日（木） 午後 1 時 30 分～4 時 30 分
会場：長野県庁西庁舎 111・112 号会議室

テーマ①「ユニバーサルツーリズムへのシニアの参加支援の取組」

- ④ = 内山理事長
- ⑤ = 矢野コーディネーター
- ⑥ = 今井祐輔さん（介護事業所学び処「和が家」）
- ⑦ = 森田勝己さん（ソーシャルネットワークの旅）
- ⑧ = 竹井整子さん（地域トラベルサポーター※①トレーナー）

※① 地域トラベルサポーター

介護の資格を有し、障がい者や高齢者など、旅行や外出中に介助が必要な方に、旅行先での移動や入浴などの介助サービスを有料で提供するサポーター。

- ⑤ ・障がい者や高齢者が誰もが気兼ねなく旅を楽しむことができるように「地域トラベルサポーター」を養成し、旅行者のニーズに合わせてサポーターが派遣できるかを考える中で、シニアが活躍する場を作っていた。
- ⑥ ・岡谷技術専門校から「介護初任者研修」を受託。
・初任者研修のメニューに「地域トラベルサポーター研修」を加えて、11 名の方が研修修了。
- ⑦ ・ユニバーサルツーリズムの定義は、障がい者や高齢者が誰もが気兼ねなく旅を楽しむことができること。
・2020 年には、東京パラリンピックがあり、2025 年には、団塊の世代が後期高齢者となるため、今後ユニバーサルツーリズムの需要は増えていくと考えている。
・これを支えるために、何が必要か。キーワードは 2 つ。
 - 「人をつくる（養成、教育すること）」 = 「トラベルサポーター」の養成
 - 「仕組みをつくること」 = 「諏訪モデル」
・諏訪モデルの特徴は、介護・医療に係る人が旅行の担い手になること。その中でシニアの活躍の場は増えてくる。
・観光施設等と連携して仕組みをつくるのが「諏訪モデル」であり、竹井さんが実践者だ。
- ⑧ ・8 年前から信州担当の外出支援専門員として、介護を伴うお客様の旅行やお出かけ（主に介護保険外のもの）に同行している。現在は主に、首都圏からのお客様に対して県内での案内や入浴介助などのサポートをしたり、県内の方の県外への旅行に同行している。
・その経験を活かして、地域トラベルサポーターのトレーナーとして指導的な立場で関わっている。
・トラベルサポーターの養成研修を受けた人は、主に介護施設の職員で、諏訪地域で約 60 名程登録されている。そのうち 50 歳以上のシニアの方は 21 名。



矢野明見シニア活動推進コーディネーター
（諏訪・上伊那地域担当）



発表者の皆さん
手前右側にあるのが「人力」

- ・昨年、上諏訪温泉で 1 泊 2 日の研修を兼ねた介護旅行を企画した。お客さまは要介護 3（身体麻痺、言葉が不自由、施設入居の 82 歳男性）の方。「人力」（体力がなくても 1 人で引っ張ることができて、少しの段差なども難なくこえられる道具）を使用して諏訪大社を参詣するなど、お客さまの希望（①温泉に入りたい、②御柱が見たい、③美味しいうなぎを食べたい）をかなえることができた。
- ・このことで「もう旅行には行けない」という、心の面でのバリアはなくなった。この取組が広まるとよい。

- ⑨ ・障がいがあっても、高齢者になっても、観光で行きたいところに行く、楽しみたいという欲求をかなえてあげることができたということですね。
・矢野さんのどういう働きかけから、この活動が始まったのですか。
- ⑩ ・今回の取組は、シニアの方の、我慢強くて、粘り強くて、今まで培ってきた知識や経験を活かせるすばらしい取組。
・「観光」というキーワードに、シニアはとても反応する、そして地元が大好き。このシニアの特性と、「観光」と「福祉」とをつなげると良いと思い、まずは森田さんに相談した。
- ⑨ ・森田さん、どういふ働きかけを受けて、この活動に関わったのですか。
前身は福祉の仕事をしていて聞いていますが…。
- ⑩ ・障がい者支援を諏訪地域で16年やっていたので、障がい者のためになるとなると血が騒ぐ。
・介護施設の施設長を1年半やっていて、ちょうど引退した時期に、矢野さんから今回の相談を受けた。障がい者のためなら、「よし！もう一度やろう」と関わらせていただいた。
- ⑨ ・今井さんは、介護事業をやられていますよね。ユニバーサルツーリズムにどういふかたちで関わって、どんなことをしたのですか。
- ⑩ ・もともと介護の初任者研修を行っていたところ、矢野さんから「トラベルサポーター」についての相談があった。
・はじめは何のことかわからなかったが、介助するだけが介護の世界ではなく、障がい者の思いを実現できることが介護の醍醐味であると思い、今回の話を受けた。
・トラベルサポーター研修を受託したことにより、ホールドカルチャーではなく、新たな世界の幕開けとなって、勉強いただき、人材を輩出するに至った。
- ⑨ ・実際にトレーニング、学びの場をつくったということですが、どういふものなんですか。
- ⑩ ・公共訓練にプラスαとして「旅行」に関する部分を加えた。
・介護事業者は「ご利用者さま」というが、「観光」の場合は、「お客様」という表現の違いがある。
・この違いは「察する」部分。この部分が介護人材を育成する上で、プラスαの人材を育成することにつながり、その先には介護業界の質の向上にもつながる。
・「観光」は「地域の営み」に光りをあてること。諏訪には「温泉がある営み」、「山がある暮らしと営み」がある。その暮らしを見せるにはシニアの方がもってこいである。
- ⑨ ・なぜシニアがもってこいなんですか。
- ⑩ ・シニアの皆さんは、郷土愛が深いから。
・観光は、暮らしている方にとって、「ここがいい」といふ愛情があって、ウェルカムすることが大事。
- ⑨ ・シニアには愛情と自分の地域に対する誇りがある。
- ⑩ ・ここが美味しいとか、地域の方ならではのものを持っている。その人たちに、介護の資格があれば、「鬼に金棒」。
- ⑨ ・そのトレーナーとして、竹井さんがいますが、実際にシニアの皆さんのトレーナーをしていて、どうなんでしょう。



今井祐輔さん
(介護事業所学び処「和が家」)

- ⑩ 竹 ・介護施設の職員さんは、バリアフリーで、何もかもが安全な中で介護の仕事をしているが、いったん外に出るとフルバリアである。また、施設の中だと介護保険に縛られているので、やっていいこと、ダメなことがあり、ダメなことは絶対にできない。
- ・しかし、外に出てしまえば、色々なバリアを乗り越えるためには、臨機応変、知恵を使って乗り越えていかなければいけない。バリアだらけのアテンドは、ノウハウが違うので、それを教えたいと思う。



竹井整子さん
(地域トラベルサポータートレーナー)

- ⑨ 内 ・観光地には、山あり、坂あり、危険なところもある。障害を持っている方自身の特性やできることも異なる。
- ・それに合わせたサポートを臨機応変にできるサポーターを養成するということですね。

- ⑩ 竹 ・(介護施設の職員は) 基本的な介護技術は資格を持っているのでよいが、プラスαがない。
- ・そのプラスαをアドバイスできればと思い、自分で実際にやってみせるというかたちで関わっている。

- ⑨ 内 ・そこで、森田さん。いったん現場に引き戻して、仕掛けをつくらなければいけなかったと聞いています。

- ⑩ 森 ・今まで障がい者の旅行は、「行きたい場所に行ける」という発想がなく、「行ける場所に行く」という発想であったが、障がいがあっても、行きたい場所に連れて行こうと考えた。通常は旅行者が



森田勝己さん
(ソーシャルネットワークの旅)

計画するのを、医療・介護・福祉の者が、障がいのある方を迎え入れるには何が必要かを考えるという、発想の転換をした。

- ・そういうサポートをつくり、着地から発するということが、今の旅行には必要であると思う。
- ・旅館やホテルの皆さんは、まだバリアフリーでないと介護旅行はできないと思っているが、道具を使うとか、介護・医療・福祉の力で十分カバーできる。そういう連携をつくろうというところに火をつけたのが今回の取組。

- ⑨ 内 ・今日は「シニアの人生二毛作」が大きなテーマですが、どうやってシニアの出番をつくってあげたいでしょう。

- ⑩ 森 ・私自身も 71 歳のシニア。
- ・地域トラベルサポーターは、相手の気持ちがものすごく良くわかること、友達感覚で話せることで、とてもシニアに向いている。体力の問題はあるが、心の支え、お友だちといった点では、シニアは絶対的に優っている。

- ⑨ 内 ・シニアに活躍いただく環境をどう整えるかと考えた時に、今井さんの立場からはどうでしょうか。

- ⑩ 今 ・介護事業を行っている小さい会社なので、なかなか新卒はこない。来るのは 50 代から 70 代までの方で、もともとヘルパー等の資格を持っている方が復帰するので、現場ではやはりスムーズ。
- ・若い人が介護現場に入ると、60 代の人が入るとでは感覚がちがう。その点で、シニアの働く場所としてのフィールドが介護業界でもあると思う。

- ⑨ 内 ・シニアが生き生きと活躍する環境をつくるのはいいが、そこから見えてきた課題はありませんか。
- ・介護とは関係ない分野との「化学反応」が起きる可能性もあると思うが、イメージできることはありますか。

- ⑩ 今 ・介護業界は人が足りない。しかし、介護の研修だけではなく、トラベルサポーターとしての活躍もあるということが宣伝効果となって、介護の暗いイメージではなく、まちの中で活躍できる場がある、働ける場があるというイメージとして、岡谷だけではなく、全県で広めていただきたいと思う。

- ⑨ ・矢野C o、課題とこれからに向けてコメントをお願いします。
- ⑩ ・今回の取組は、メディカル（医療、福祉）とリテール（サービス、観光）が融合した、業界を越えた「メディテール」という新しくシニアの活躍の場を見出すというイノベーションの取組。
・若い方の職を奪うことなく、新しいシニアの活躍の場を地域課題の解決につなげ、地域に沢山あるポテンシャルを活かすという取組であった。それが今回の企業実習を通じて学ぶ「デュアルコース」。
- ⑪ ・「介護初任研修」デュアルコースは、3ヶ月座学+1ヶ月企業実習となっており、この企業実習が肝で、自分の働きたいところ、ホテルや施設で従事しつつ、トラベルサポーター養成講座も組み入れて行ったデュアルシステムである。
- ⑫ ・この仕組みがまだ全県にない。広く普及していけばと思う。
・シニアにとってお試しの場がとても大事。職場・職種に慣れてみる、やってみる、受け入れ側にとっても、“この人やれる”と思える大事な場となる。このようなデュアルコースがあることで、人材育成がより確実に定着していくと思う。
- ⑬ ・モデル的に諏訪地域で行われているこの取組を全県にどう広めていくかが課題ですね。



内山二郎理事長
(長野県長寿社会開発センター)

テーマ② 「信州子どもカフェ※②へのシニアの参加支援の取組」

- ⑨ = 内山理事長
- ⑩ = 今村コーディネーター
- ⑪ = 上沼綾子さん（飯田市ひとり親家庭福祉会 母子部長）
- ⑫ = 福島栄子さん（惣菜さくら）

※② 信州子どもカフェ

帰宅後に子どもだけで過ごすことが多く、食事を家族と一緒に食べるのが少ない子どもに対して、地域の大人と子どもたちとの「あたたかなつながり」のなかで、自立する力をつけてもらうため、「学習支援」、「食事提供」、「悩み相談」等の複数の機能・役割を持ち、家庭機能を補完する“一場所多役”の子どもの居場所づくり事業

⑩ 子どもカフェの概要について

- ・「信州子どもカフェ」は、県のモデル事業で、県NPOセンターに委託され、今年度は松本と飯田の2か所で実施。NPOセンターから長寿社会開発センターへ相談があり、飯田地域担当のコーディネーターとして参加。
- ・前職では飯田市の中学校の事務をしていた。また民生委員との関わりがあったこと、地域の公民館活動を長くやっていた関係で、児童クラブの運営委員を務めたり、放課後子ども教室の立ち上げにも携わっていた。
- ・その経験から、こどもの居場所の担い手を考えたときに、保護者ができないからこどもの居場所をつくる、保護者がやらないからお金のこともやらないといけないという事情をわかってやってくれる方でなくては務まらない。また、地域のこどもは地域が育てるものだから、地域の方に手伝ってもらわなくては、という思いがあった。
- ・そこで、呼びかけたときに、さっと手を挙げてくれるのはほとんどシニアの方であった。現役世代は手伝えない状況である。
- ・今回、県のモデル事業で進めていくということであったが、「ひとり親」であるとか、「貧困」であるとかは、非常にネガティブなイメージを持たれやすい。最初は「子ども食堂」という言い方をしていたので、かなりネガティブなイメージだった。そこで県に強くお願いしたところ、名称が「子どもカフェ」と変更になった。
- ・そのような経緯もあって、まず情報交換会を行うことになったが、飯田の様子がわからないので、どんな団体とネットワークを組んだらいいのかと、私の方へ打診があった。
- ・色々な団体を挙げていく中で、前年度からこどもの学習支援の事業を進めていた「ひとり親家庭福祉会」のほか、他に19団体が集まった。
- ・その19団体の一つが「惣菜さくら」。惣菜さくらは、空き店舗を活用し、シニアの皆さんが中心となって、お弁当の配食事業などを手掛けている団体。今日参加の福島さんは主に調理を担当するほか、お弁当の配達もしている方。



今村光利シニア活動推進コーディネーター
(下伊那・木曾地域担当)

- ・また、惣菜さくらのオーナーさんは、10数年前からグリーンツーリズム（修学旅行体験教室、農業体験、ワーキングホリデー等）を長年にわたって手がけている。
- ・このような団体が結びつくことによって、シニアの学習支援ボランティア（教員OB）を探すことも捗り、情報交換会が5月だったにも関わらず、カフェのオープンが8月というように、スムーズに進んだ。
- ・あとは、民生委員等に結びつけるというような、地域に理解を求めていくという部分に、私が少し携わらせてもらった。

⑨ 上沼さん、学習支援の連絡調整役をされたということですが、具体的にどういふことをされたのでしょうか。

- ⑪ 上沼さん、もともと平成27年10月から学習支援は始めていたが、平成28年度にこのモデル事業を始めるに当たり、生徒の募集や親への周知、先生方など担ってくれる方の募集を行い、いつなら来られるか、何を教えてくれるかなどの連絡調整を主にさせていただいた。

- ⑥ ・その学習支援をしてくれる方は、シニアが多いということですが、どんなシニアの方がいますか。
・また今、何人くらいの方がそういう活動をされているのでしょうか。



上沼綾子さん
(飯田市ひとり親家庭福祉会 母子部長)

- ⑦ ・元教員の方や、塾講師の経験のある方、何かしたい、福祉に携わることや皆さんのお役に立てることをしたいという方が集まってきている。
・講師の登録が約 10 名。そのうち半数以上がシニアである。あとは、大学生や企業に勤めている方でボランティアをやりたいという方が登録されている。

- ⑧ ・福島さんは食事の提供の支援をされているということですが、具体的にはどのように活動されているのでしょうか。また、そこではシニアの方がどのように関わっているのですか。

- ⑨ ・モデル事業が始まって、具体的に動いたのは、8月から。
・調理師の免許を活かして、ひとり親家庭OBのお母さんたちと一緒に、フードバンクが届けてくれた食材や地元の野菜を使い、その日に献立をたて、つくるといふかたちで活動している。
・「惣菜さくら」は、そもそもシニアがやっている団体。もともとは、地元座光寺地区の農協婦人部の中で、なにかやりたいと思った有志の方たちが、単発で活動していた。そこへ、「さんぼ道」という店をやっていた私が入って、毎回営業ができるようになった。

- ⑩ ・今村さん、色々な人たちを集めて情報交換会を行い、プランを練り上げていったそうですね。色々な主体が集まり、一緒にやることによって、豊かな活動がうまれてくると思うのですが、その点について、今回の取組ではどうでしたか。

- ⑪ ・県のモデル事業として地域で実施するときに、飯田の場合、一つの組織がすべて請け負ってプランニングするという手法が取りにくかった。
・様々な関係団体が加わることで、その団体の人脈や大きな広がりがある。
・今回も、フードバンクからはメインになる主食がくるが、その他の食材、野菜等については、シニアの農家の方々のネットワークによって、無償で提供していただき、夏場は困ることがなかった。
・シニアの方が今まで持っていたスキルや、いくつもの関係機関がごちゃ混ぜに入ってきたことにより、そういった連携が非常にスムーズにでき、完成度も高いと見ている。
・学習支援についても、元教員の方一人ひとりに声をかけていったことや、抵抗感をなくすために、広報をしたことにより、みんな気にかけてくれ、スキルのある方がきてくれた。そのおかげで、参加した子どもたちの学習レベル、ニーズにあった学習の提供ができています。
・また、ひとり親が抱えているのは、学習の問題だけではなく、発達障がいなどや不登校傾向だったりという悩みである。そのような繊細な部分は、学校でも若手の先生はなかなか対応できない。そこへベテランの先生方が加わってくれることによって、そういう部分も細かく見ることができる。それはシニアでなければできないことではないかと思う。

- ⑫ ・まさに、現役時代に経験した、培ってきたことが活かされるというわけですね。
・かなり情報発信していかないと、どこにそういうニーズがあるということが、シニアの方にはわからないのではないのでしょうか。

- ⑬ ・そうですね。なかなかこの情報を発信できていなかったのですが、たまたま自分の仕事の関係もあって、色々なところに先生はいないかと声を掛けるところ、こんな先生がいると紹介いただいた。
・そして、それぞれの方にお願ひに行ったり、電話をしたりして、事業の趣旨や内容をお伝えしたところ、ご理解いただき、集まっていた。

- ⑭ ・この取組は県のモデル事業として始まったということですが、何年までの事業ですか。
・事業が終わったあと、活動費等も含め、どう継続していくかが問題だと思うのですが、どうでしょうか。

- ⊕ ・事業は、この29年3月までと聞いている。
 ・取組がどうなるのかは、私たちも今の段階ではわからないところ。せつかくこの形ができ、勉強にくるこどもたちも楽しみにしており、先生たちもこどもたちのことを気にしているので、継続されることを願っている。
- Ⓐ ・福島さん、やはり勉強をするだけではなく、そこで美味しい食事をとれることもポイントだということですね。
- Ⓡ ・そうですね。孤食が問題となっているので、こどもが一人で食べるという状況を防ぎたいと思う。
- Ⓐ ・そのために、そこで交流したり、みんなで食べたりすることが大切なんですね。
- Ⓡ ・届けられた食材で、間に合わせではない食事をする、きちんと器に盛って、きちんと「いただきます」と「いただきました」をする、それも大事だと思っている。
 ・格差などのよくない社会をつくったのは、私たちシニア世代の人間だと思っている。だから、こどもの教育、食事についても、シニアの役目だと思う。
- Ⓐ ・役割として、責任として活動されているということですか。
- Ⓡ ・そうです。もちろん行政の支援はきちんとしていただいて、使うべきところに使うもの（人手・経費）を使っていったらよいと思う。
 ・「人生二毛作」というのは、今、二毛作をやっている者が話をするのではなく、これから人生二毛作に入る皆さんが、若いうちからそれぞれの心の用意しておくことが大事だと思っている。
- Ⓐ ・「惣菜さくら」には、シニアだけではなく、若い世代の方も入ってきているのでしょうか。
- Ⓡ ・入ってきています。忙しいときに、応援を頼むと、若い人がきてくれて、うまい具合に活動できている。
- Ⓐ ・それがうまく継続していくと良いですね。
- Ⓡ ・そうですね。次に活動してくれる人がいないということが、一番の問題。
- Ⓐ ・後継者をどう育てていくかという問題ですね。
 ・今村さん、県のモデル事業としてやってきて、非常にいい成果を挙げつつあるということですが、今後どのように継続していこうとしているのですか。
- Ⓡ ・学習支援事業については、継続できる余地はあるのではないかと考えている。
 ・県と交渉することもあるが、飯田市としてもどのように考えていくかも、事業の継続を考える上でポイントとなる。
 ・実際に費用がかかっているのは、裏方さんの交通費など。来てくれるのは意欲のある方ばかりなので、そこを自費で賄っていただくなどすれば、継続はできると思う。食材についても、それこそボランティアでほとんど賄える。
 ・その部分についても、やはりシニアの方の力をお借りしたい。お金を出すのもボランティア、食材を提供するのもボランティア、手を貸すのもボランティア、知恵を出すのもボランティアである。シニアの方がいろいろなスキルを使っていただくことによって、少しずつ道は見えてくるのではないかと考えている。
 ・「今の世の中を戦後70年かけてつくってきたのは今のシニアだから、その責任としてやっている」というシニアの方も非常に多い。そのような状況であるので、あとは多少背中を押してくれるくらいのお金が調達できれば、事業を継続していけるのではないかと考える。



福島栄子さん
 (惣菜さくら)

テーマ③ 「子守りボランティアを通じた世代間交流の取組」

- ⑨ = 内山理事長
- ⑩ = 斎藤コーディネーター
- ⑪ = 稲村和美さん（ながの子育てネット）
- ⑫ = 岩下洋子さん（シニア大学学生）

- ⑩ ・小さな子どもを世話するという言葉に「託児」と「子守り」という2つの言葉ある。「託児」は「子どもを託す」、「子守り」は「子どもを守る、見守る」と書く。お母さんと同じ空間で、見守るくらいならできかなと思うシニアの皆さんの気持ちが、今求められていると思う。
- ・便利な世の中なのに、子育てがしにくい時代といわれている。地域のつながりが薄れ、身近に相談できる人がいない、頼れる人がいないなど、不安を抱えているお母さんも少なくないなど、子育てをするお母さんたちの孤独感が高まっている。
- ・その一方で、地域で何か役に立てることはないだろうか、経験があるから大変な子育てを少しでも応援したいと思っているシニアの方もいる。
- ・長野市内にも、子育てサークルなど子育てを応援する個人や団体が多くある。そのような支援者同士をつないで、支援を必要とする人と、支援を提供する人をつなぐことを目的に活動しているのが、「ながの子育てネット」代表の稲村さんである。
- ・お母さんたちが講座を受けている間に、子どもを見てくれる子育て経験が豊富なシニアとつながれないかという稲村さんからの相談をきっかけに、シニアによる子守りボランティアの活動がスタートした。
- ・日頃から、シニア大生から子育て支援に関心があると聴いていたので、シニア大学の授業やタウンミーティングなどで、お子守りボランティアのニーズがあるということ、シニアの皆さんにお伝えし、子守りボランティアの登録説明会への参加をお誘いした。



斎藤むつみシニア活動推進コーディネーター
(長野・北信地域担当)

- ・その呼びかけにより、説明会に参加し、ボランティアに登録いただいたのが、シニア大生の岩下さんである。
- ・その際、コーディネーターとして、シニアの方の気持ちとお母さんたちの気持ち、そして稲村さんの考えなどを仲介するかたちで、間に入れていただいた。
- ・岩下さんは、その時つながった子育てサークルにずっと参加されていて、お母さんたちからも、担い手というよりはメンバーの一員、また子育ての先輩、身近な相談相手という存在。
- ・また、岩下さんにお子守りボランティアで来ていただいて、とても助かっているというお母さんたちの話を聞き、岩下さん自身もやりがいを感じていると聞いている。

- ⑨ ・稲村さん、この活動を始めるに当たって、タウンミーティングでの出会いが大きかったと聞いていますが、いかがですか。
- ⑪ ・私たち「ながの子育てネット」は、子育てをしながら、助けてもらうだけではなく、何かできることもあるのではないかという思いのもと、市内で活動しているお母さんや子育てサークルをつないで、そういうことをやりやすくしようと活動している。
- ・その会員の中から、講座の時にちょっとお子守りをしてる人がいないかと相談があった。わずかな参加費でやっているサークル活動なので、託児にお金を割いて、参加費を高くあげることはいさくないという話であった。
- ・そこで、サークル活動は平日の昼や午前中に活動することが多いので、シニアの方が見てくれるのではと思いつき、シニア活動推進コーディネーターに相談したところ、説明会をやってみてはどうかと提案していただき、タウンミーティングに参加させてもらった。

- ⑨ ・そのタウンミーティングでうまくつながったのが、岩下さん。岩下さんは今シニア大学2年生。タウンミーティングに参加され、更にシニア大学の授業で子育て支援について学び、フィールドワークをやろうという話だったと聞きましたが、この取組とはどのようにつながっていったのですか。
- ⑩ ・斎藤コーディネーターの紹介で、稲村さんのグループに参加。最初はすごく勇気が必要で、できるかなとドキドキの中行ったが、何かできそうだと思い、登録をした。
- ⑨ ・斎藤コーディネーター、どのように岩下さんの後押しをしたのでしょうか。
- ⑩ ・私も子どもがいて、関西から長野に来たので、両親ともに近くにいないで困ったことを伝え、まずは行ってみましょうよと手を引っ張って参加していただいた。
- ⑨ ・参加してみてどうでしたか。やっぱりできそうと思ったのは、何故ですか。
- ⑩ ・いろいろお話を聞いて、このくらいならお手伝いできるのではと思い、まずはやってみようと思って参加することにした。
- ⑨ ・この活動は、どのような登録制度をとっているのですか。
- ⑩ ・最初は、トラブルがないようにするためにいろいろ考え、お互い安心して預け合いができればよいと思い、登録制度ということにした。



稲村和美さん
(ながの子育てネット)

- ・勉強や資格などが必要なのか、1時間いくらと決めた方がよいかなどの条件を勝手に決めるには、お母さんたちの気持ちとお子守りをしていただく方の気持ちとのすり合わせをしないといけないと思い、説明会でお互いの条件を出し合うワークショップをさせていただいた。そのワークショップには、お子さんを連れてきた方もいたので、触れ合う機会にもなり、子守りボランティアの感覚も伝わったのではないかと思う。
- ・登録説明会と言っているが、これはまさしく「お見合い」と思っている。そして、めでたく1組成立した。

- ⑨ ・その第1号が岩下さんだったということですね。
- ・よく昔の子育ての感覚や価値観と、今のお母さんの価値観や子育ての姿勢は違うと言われていますが、預けている間に昔の考えを刷り込まれちゃったら困るというお母さんはいませんでしたか。
- ⑩ ・私も心配していたところであったが、説明会で話を聞くと、若いお母さんたちは、今のこどもは、おじいちゃん、おばあちゃんと接する機会が少ないので、一緒にいてもらうだけでいいという方が多かった。
- ⑨ ・核家族化が進み、家におじいちゃん、おばあちゃんがないこどもも結構多い。おじいちゃん、おばあちゃん世代という体験だけでも、こどもにとって良いということですね。
- ⑩ ・こどもに対してこうしてもらわないと困るということではなく、こどもの近くにいるだけで、見守ってしてくれるだけでいいというお母さんがいて、私にとっても新発見だった。
- ⑨ ・岩下さんからすると、逆に昔のこどもと今のこどもはずいぶん違うと感ずることや、何故お母さんはこういうことをしないのだろうと思うことはありませんか。
- ⑩ ・そういうことは全く感じなかった。
- ⑨ ・岩下さんが今やっている役割というのは、どういうことをされているのですか。

- ⑥ ・お母さんたちがちょっと体を動かしている時、お子さんがお母さんから離れておもちゃで遊んでいる場合に、危なくないように見ているというようなことをしている。
- ⑨ ・**本当に見守っている、守っている「お子守り」という感じですね。**
・**稲村さん、シニアの方に子守りボランティアをお願いして、何か成果として見えてきたものありますか。**
- ⑩ ・これは異年齢交流であると感じた。一方的にどちらかが何かをやらせて、一方がやってあげているというような関係ではなく、「交流」というかたちである。シニアの方には、無償で来ていただいているが、お金ではないものがお互いにあるのではないかというように見えている。
・お母さんたちもとても安心して活動できているし、お子さんも本当に懐いているのがわかる。こどもが好きな人が来てくれていることが大きいと思う。これは仕事ではなく、気持ちの問題だと思う。
- ⑨ ・**岩下さん、活動をしてうれしかった、よかったなと思うことはどんなことですか。**
- ⑥ ・お母さんたちが、元気にはつらつとして帰っていく時、ちょっと役に立ったのかな、よかったなと思う。
- ⑨ ・よく**社会でこどもを育てようと言われ、安心してこどもを育てられる環境をどう作るかが、今、社会的な問題となっていますが、その一端を担っているという感じですね。**
・**斎藤さん、この活動をもっと広げていく、色々な人たちがそれに関わっていくような仕掛けづくりを考えたとき、何か良いアイデアはありますか。**
- ⑩ ・できれば地域の中で、シニアの方と若いお母さんやお子さんが交わる機会が増えれば良いと思う。
・子育てサークルなどと一緒に活動できれば、それがコミュニティの再生にもつながっていくと思うし、今のところ女性が中心となっているが、おじいちゃんのお子守りさんが出てきてくれると良いと思う。
・今回、人見知り激しいお子さんが、岩下さんに懐いて遊ぶ姿を見ることができた。またそれが、お母さんにとっても、こどもと離れるきっかけになった。このようなきっかけの場として、この活動が繋がっていけば良いと感じた。



岩下洋子さん
(長野県シニア大学 学生)

テーマ④ 「まちの縁側※③づくりの取組」

- ① = 内山理事長
- ② = 戸田コーディネーター
- ③ = 新井由文さん（ケーズタウン若里 館長）
- ④ = 島田 明さん（シニア大学学生、グループリーダー）

※③ まちの縁側

単なる場所ではなく、誰もが気軽に立ち寄れて、老若男女がつどい、お茶を飲んだり、談笑したりしながら、心をかよわせ、つながりあう地域の居場所。

- ④ ・まちの縁側の取組は、シニア大学2年生の島田さんのひとつ上の代である、平成27年度のシニア大学2年生から続いている活動。
- ・シニア大学では社会参加の授業を行っており、その中で「地域の安心、居場所づくり」ということに関心を持つ学生が多く、平成27年度の2年生の中に、まちの縁側づくりをしたいという学生のグループがあった。
- ・しかし、メンバーは複数の市町村から集まっていて、住む地域が違うため、1か所で地域の居場所づくりをすることは難しいなどの課題があり、活動が行き詰っていた。
- ・そこで、「人が来るのを待っているのではなく、人がいるところに出かける」という、企画的なサロンを展開してはどうかと提案した。

- ① ・ゼロから居場所をつくり出すのではなく、ということですね。

- ② ・人が集まる場所に行って、そこを居場所にしてしまうという発想。地域の居場所＝公民館というような発想を一掃し、少しアドバイスさせていただいた。
- ・一方、「ケーズタウン若里」の新井館長さんが、以前から医療・福祉にも力を入れていて、社員教育や、社会貢献の活動をされているということを知っていたので、ケーズタウン内のスーパーで高齢者が気軽に立ち寄れるサロン（まちの縁側）を開くという発想を相談したところ、すぐに賛同いただいた。新井さんも、スーパーでずっと一人でお茶を飲んでいるシニアの方がいることが気になっていたとのこと。
- ・そこで、それぞれの課題を合わせると、違う視点でサロンを展開していけるのではないかと思います。シニア大生に話したところ、昨年シニア大生によるスーパーでのサロンが実現した。
- ・そこに、長野市の介護保険課や、ケーズタウン若里がある芹田地区の包括支援センターの保健師さんに専門職として来ていただいて、介護・健康相談プラスサロンというかたちで行った。
- ・今年は、1年生の時から、まちの縁側をテーマにフィールドワークに取り組んでいた島田さんたちのグループが自分たちもやりたいと引き継いだ。
- ・今日はスーパーでのサロンの話になるが、メンバーの中には、すでに自宅を解放してまちの縁側をやっている方が2人いる。そんな広がりも今日お話ししたいと思う。



戸田千登美シニア活動推進コーディネーター
(総括コーディネーター)

- ③ ・ケーズタウンの新井さんはもともと福祉に関心があったと聞きましたが、ケーズタウンでまちの縁側を開くと相談を受けた時に、すんなり理解できましたか。

- ③ ・ケーズタウン若里は、長野市の若里地区にある商業施設ですが、お年寄りの方が一人で来てそのまま帰っていく、または一人寂しく無料のお茶を飲んでいく、そういう方も結構いらっしゃって、気にはなっていた。
- ・私どもは、他の商業施設と比べて、福祉・介護・医療に関する方に認めてもらいたいという方針を持って営業している。

- ① ・それは会社としての方針ですか。

- ⑧ ・いえ、私個人として。そういうところから、相談を受けたとき、失敗してもいいから、何かやってみたいなとお引き受けした。
- ⑨ ・島田さんは、先輩がやったことを受け継いだということですが、居場所づくりやまちの縁側ということは、関心のあることだったのですか。

- ⑩ ・そうですね。シニア大学1年生の時に、社会参加の授業があり、12人のグループで、何をやろうか考えた。ちょうどその時期に千曲市で開催された「信州ねりんピック」に参加したところ、たまたま「まちの縁側」のブースが気にとまり、そこに知り合いがいて、話を聞いて面白そうだなと思ったことが、取組を始めたきっかけとなった。
- ・その知り合いの案内で、長野市松代町にあるまちの縁側を見学させてもらい、実際に自宅を解放したり、古民家を解放しているなど、いろいろなまちの縁側があるということがわかった。
- ・2年生になって、引き続きまちの縁側をテーマにやろうということになり、ほかのグループの6名も加わり、18名で取り組んだ。新たなメンバーもいたので、戸田Cに手伝ってもらい、まちの縁側とは何ぞやということから勉強させてもらった。そして、メンバーの中にも、自宅の庭を解放してまちの縁側をやるという方も出てきた。



島田明さん
(長野県シニア大学 学生)

- ・ケースタウンのサロンについては、1年生の時に、2年生の活動発表会に参加し、発表を聞いて評価もよかったので、来年はこれをやろうと勝手に自分で決めていた。先輩たちも引き続きやるだろうから、違う日にやろうと考えていたところ、先輩たちの取組が頓挫してしまっているという話を聞いた。
- ・そこで、関係者が集まり善後策を協議することになり、新井館長さんからもぜひサロンを続けてほしいと話もあったため、私たちのグループでサロンをやらせていただくこととなった。

- ⑪ ・戸田さん、この取組は発想の転換から始まっているということですが、ただお茶を飲む場をつくるだけではなく、長野市の介護保険課や包括支援センターも巻き込んで開催したということが大事なポイントだと思いますが、どうですか。

- ⑫ ・シニアの方のすごいと思うところは、何かをやると、必ず「気づき」と「疑問」が出てくること。
- ・サロンを始めようとした時、シニア大生から、素人だけでサロンを開いて、人が寄ってきてくれるだろうかという不安が出てきた。そこで、まず市の介護保険課に聞いてみようということになった。
- ・相談したところ、介護保険課でも、高齢者の杖の測定等をやっているが、杖の長さが合っていない高齢者も多いので指導したい、他にも唾液腺マッサージなどやることはいっぱいあるので、協力したいと受けてくれた。
- ・2回目の開催では、保健師さんに参加してもらいたいということで、シニア大生が自分で連絡をとり、地元芹田地区の包括支援センターの保健師さんが血圧測定をしてくれることになった。
- ・孤立している方は、専門職の人としかつながっていない方が多い。普通の人とのつながりが全くないため、その方たちが公民館などで行われる地域のサロンに行っているかという、ほとんど行っていないと思う。
- ・今回の取組については、スーパーなら誰でも買い物に行くので、行った帰りにちょっと寄るといって、サロンとしての機能より、「きっかけの場」として、そこで誰かとつながって、地域のつながりや、ちょっと困った時に相談できるところができれば良いという私の目論見もあった。
- ・地域サロンとは少し形態が違っても、きっかけの入り口的な場所として、住民（シニア）と、企業（スーパー）と、行政とが連携した取組としてできないだろうかと考えていた。

- ⑬ ・新井さん、サロンにはどのようなシニアの方が来て、どのような感じでいきいきとして帰って行かれたのでしょうか。

- ⑨ ・ 105 歳の方が、1 人でお買い物に來られて、帰りに寄って行かれた。
- ・ シニア大生の方が、「ちょっとお茶を飲んでいきませんか」と積極的にお声かけをされていて、苦情がくるかなと思うくらい積極的だったが、全くそのようなことはなく、2 時間半という短い時間の中で、何十人と非常に多くの方が集まってくれた。
- ・ スーパーでは木曜日がシルバースデーでシニアが多い日なので、この活動を続けていけば、毎月木曜日は何かやっている日と定着して、一人暮らしのシニアの方も、その日にまた来て、知り合い同士ができていくのではないかなと思っている。



新井由文さん
(ケーズタウン若里 館長)

- ⑩ ・ 105 歳の方が、サロンに來て、血圧測定などをして帰られたりするんですね。
- ・ そのサロンをやった時の様子が映像であるそうですね。ちょっと見せていただきましょう。
- ⑪ ・ 長野ケーブルテレビから取材を受けて、ニュースで放送されたものを流します。

« 映 像 »



長野ケーブルテレビの映像



映像を見つめる会場の様子

- ⑫ ・ 戸田 C o、最後にまとめとして、課題やこれからもっとこのようにして広げていきたいということはありませんか。
- ⑬ ・ シニアの方が何か活動をする、「気づき」がたくさん生まれ、さらにそれを自分たちでどんどんクリエティブにしていくことができると、色々な活動から感じた。
- ・ そのひとつの例が、今日持ってきた「あなたの今日の血圧」というカード。はじめてサロンを行ったときに、血圧測定をした方から「血圧測定の数値を忘れてしまうから、何かを書いておきたいけれど、何も持っていない」という声を聞いていたところ、次のサロンの時にはもうこのカードが用意されていた。
- ・ このカードは、シニア大生が自分で考え、包括支援センターなどの電話番号も許可を得て、相談連絡先として載せてあり、立ち寄った高齢者の方がそこに今日の血圧を記録して、持ち帰れるというものになっている。
- ・ 島田さんたちは、実によく勉強している。まちの縁側とは何ぞやから始まり、実際にまちの縁側を何か所も見に行っている。学習と経験と気づきを繰り返しながら、どんどんスキルアップしていくところがシニアの強みであるということを感じている。
- ・ そういう場を、私たちコーディネーターは提供していかなくてはいけないと思っている。

テーマ⑤ 「地域の居場所(サロン)づくりの取組」

- ④ = 内山理事長
- ⑤ = 下倉コーディネーター
- ⑥ = 滝澤共子さん (上田市社協 丸子地区センター)
- ⑦ = 白井由美子さん (チームあったかい輪 会長)

- ⑤ ・ 上田市丸子地区の取組を紹介。丸子地区は、昔ながらに住んでいる方もいれば、住宅地を中心に人口も増えているエリア。大規模なスーパーや工場があるという地域ではなく、ブドウの栽培などで地域づくりに取り組んでいる地域。
- ・ 上田市社協が、人間関係が希薄化した地域で、地元の方に対して、地域を再評価して社会資源をどう活かしていけばよいかということを考える「地域づくりの講座」を2年前に開催。その講座を開催したのが、上田市社協の滝澤さんであり、その講座を受講したのが、「チームあったかい輪」の白井さんである。その白井さんが講座でテーマとして取り組んだのが、「居場所づくり」であった。
- ・ また同時期に、地元の社会施設法人「まるこ福祉会」が運営する障がい者施設が高齢者の施設を建設するに当たり、施設としても地域とつながりたい、地域で孤立化する方々を何とかつなげたいという思いから、地域交流のスペースをつくった。その施設の思いと白井さんの思いが結びついて「あったかい輪」という名のサロンの活動が始まった。
- ・ 「あったかい輪」はカフェスペースで、昔スーパーだったところをまるこ福祉会が改装してつくったもの。そこで、白井さんたちボランティアの方々がカフェの運営に携わり、障がい者施設で製造した焼きたてのパンやコーヒーを提供している。
- ・ このようにして、車イスの方や子育て中のお母さんなど、地域の色々な方が集える場づくりが始まった。



下倉亮一シニア活動推進コーディネーター
(佐久・上小地域担当)

- ・ 最近、コミュニティカフェという言い方をしたり、そういった集いというのがテーマになっているが、スターバックスと何が違うのかと言われると、施設の運営に携わっている白井さんのような、ボランティアの方々の、訪れた方に対してのまなざしであると思う。
- ・ 単にパンやコーヒーを売ることが目的ではなく、そういったものをツールにして、コミュニケーションをどうやって育んでいくかというのが、取組の大きな目標になっている。
- ・ こうした地域の取組を、皆さんに知ってもらい、地域の人間の輪が広がっていけばいいということもあり、今年は大町ミーティングをその会場で行う予定。
- ・ 人の輪が広がり始めたというのが、今の状況である。

- ④ ・ **地域づくり講座を担当したのが滝澤さんということですが、この講座というのはどのような内容となっているのですか。**
- ⑥ ・ 地域の中で孤立しがちな高齢者等の生きがいづくりという点から、その居場所づくりについて考える「地域づくり講座」として平成26年度から開催。初年度は、長野市の「まちの縁側」の取組が有名だったので、それが地域の中で参考になればと思い、手法のひとつとして「まちの縁側」について学習した。
- ・ 昔に比べ、地域で隣近所のつきあい等が希薄になっている中、高齢者の方も含め、地域の方々が寄り添えるような場所や、生きがいをもって暮らせるような地域ができていったらいいという思いがきっかけとなり、職員が企画し、始めたもの。
- ・ 白井さんはもともと熱い思いで、活動されていた方なので、地域づくり講座はきっかけでしかないけれども、そういった熱い思いを持った方々がたくさん受講されていて、日頃私たち社協と関わっ

ていたボランティアの方も「あったかい輪」に関わっていただくなど、そこを拠点に地域の輪が広がっていると感じている。

- ⑥ 白井さんは、地域づくり講座に参加されて「あんまりいいことなかった」と話されていましたが、正直なところを教えてください。
- ⑦ 地域づくり講座へ参加した目的は、そこに同じ思いの人がいたら、すぐにでもその人とサロンのグループを立ちあげようという気持ちがあり、参加した。
- それというのも、スーパーの空き店舗の中の福祉施設があまりにも地域から孤立しており、それが気になっていて、私自身も交流機会が少なかったので、何とかしてここを地域の人と結びつけたいという思いが強かった。
 - 講座を受講してよかったことは、コーディネーターの下倉さんが声を掛けてくれたこと。下倉さんの存在は知らなかったが、ワークショップの中で私を気にかけてくれたようで、声をかけてくれた。
 - 後日お会いして、県の補助金制度があるなど色々なお話をしてくれた。その時に長寿社会開発センターの「いきいき中高年社会貢献活動」の支援金の話もされた。金額が非常に少なく、私が思い描いていることは、これではできないと思ったのですが、「いきいき中高年」というキャッチフレーズだけは気に入った。
 - 私の中で、この「いきいき中高年」を探して、何としてもサロンを立ち上げようという気持ちが盛り上がってきた。結局、資金づくりは、上田市の補助制度で、5年間で200万円を助成してもらえる事業（「わがまち魅力アップ応援事業」）があったので、そこに挑戦した。1回目は落ちたが、平成28年4月からの事業に申し込んで、3年間で200万円いただくことになり、今、それで元気に活動している。



白井由美子さん
(チームあったかい輪 会長)

- ⑧ まるこ福祉会の知的障がい者施設とはどういう施設なのですか。
- ⑨ 個人の経営で、行政とは結びついていないので、孤立した部分がある。そこがとても気になった。
- ⑩ そこを改装するということですか。
- ⑪ 施設の改装については、国の助成金を活用して、上田市と福祉会がタイアップして行った。
- 広い場所に6～7人掛けの大きいテーブルが4つあり、非常によい空間。打合せするのに都合がよく、そこに私たちがいるから気楽だということで、皆さんよく集まってきている。
 - 1日の平均来客数は、35人。
 - 多世代交流会ということで、コンサートや講演会など大きなイベントもやっている。1回目の参加者は300人。この時は、パン工房のパンの宣伝もしたかったのですが、昼食も参加費もタダでやったところ、300人に膨れてしまって、ボランティアさんが大変だった。それで、2回目のクリスマス会は、武田徹先生をお招きして、定員100人と限定したら随分苦情があった。1月のお年玉ビンゴ大会も、宣伝ということでお食事も考えて、100人限定で実施したところ。
 - 10月15日オープンから3月までの間で十分PRもできたので、新年度からは、食事をサービスするというお金のかかることはやめて、午後からの講演会というように、新しい企画を考えようと思っている。
 - また、水曜日と金曜日に、皆さんが興味のあるような講座を設けているので、人が集まってくる。例えば、大きなチラシの後ろに講座を書いて配ると、サロンにきた方が見て、申し込むようになっている。その講座は、子育て講座や健康講座、親子で楽しめるものなど、色々な講座を設けている。だから、1週間のうち水曜日と金曜日はにぎやかになって、ボランティアさんも楽しみながらやっている。

- ⑨ ・下倉さんがここで仕掛けたコーディネートのポイントはどういったところでしょうか。
- ⑩ ・社協が地域づくりに取り組む中で、地域づくり講座もあるが、他にも男性講座のようなものをきっかけに、男性の方がコーヒーサロンを始めた事例もある。そういう地域の人と人とのつながりをつくっていくのがとても上手だなという印象を、丸子地区の社協の取組には感じており、その取組をいかに広げていくかというのが、私の役どころだと思って活動している。
- ⑪ ・滝澤さん、人と人をつなげる、コーディネートするということが社協の大きな役割であり、いい人を見つけて出して、後押ししてあげたり、仕掛けたりするということは、まさにセンターのコーディネーターの役割でもあると思います。
 ・このようなことも踏まえて、今日のテーマである「シニアの活動の場づくり」に関して、どのようにお考えになっていますか。
- ⑫ ・丸子地域はもともとボランティア活動が盛んな地域。そのボランティアをやっている年代は、まさにシニア世代が中心である。シニアの方々の多岐にわたる活動や思いがある。その思いをいかに自分の活動につなげていくかということを考えながら、活動している。
 ・私たちはコーディネートする立場だが、そういう思いを持っている方がたくさんいることが、地域の宝であると感じた。
- ⑬ ・シニアの方はそれぞれ思いを持っている。その思いを形にしないといけませんね。それを後押しするというのが、社協のコーディネーターの仕事であり、我々長寿社会開発センターのコーディネーターの仕事ですね。
- ⑭ ・白井さんの活動もそうなのですが、その場を拠点に大勢の方がボランティアとして生き生きと暮らしているのを見て、やはり自分の地域で生きがいを持って暮らしていけるというのが、生きていく上での一番の宝なのではないかなと思う。それを常に後押ししていかなければいけないという点で、私たちも皆さんの力になっていければと考えている。



滝澤共子さん
 (上田市社会福祉協議会 丸子地区センター)